

大阪商業大学学術情報リポジトリ

第 1 次世界大戦と中東の生成 イランの為替と 金融を中心として

研究代表者	水田 正史
報告年度	2010-05-19
研究課題番号	18530271
雑誌名	科学研究費助成事業 研究成果報告書
ページ	1-4
URL	http://id.nii.ac.jp/1297/00001230/



平成 22 年 5 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18530271
 研究課題名（和文）第1次世界大戦と中東の生成——イランの為替と金融を中心として——
 研究課題名（英文）The First World War and the Creation of the Middle East :
 Focusing on the Exchange and Finance of Iran
 研究代表者
 水田 正史（MIZUTA MASASHI）
 大阪商業大学・総合経営学部・教授
 研究者番号：80219633

研究成果の概要（和文）：

第1次世界大戦勃発時におけるイラン支配の態様はイギリスとロシアで異なっていた。第1次世界大戦中、イランでは幾度も政権交代が行なわれたが、それらの多くにおいて、諸外国による関与が見られた。イギリスがアラビア半島につくらせようとしていた国家は、その資金的中核としての銀行を必要としていた。1917年、ロシアで三月革命が起こり、ロシア軍がイランから撤退した。

研究成果の概要（英文）：

The forms of control of Iran by the Powers were different .During the First World War,Iran experienced the changes of government many times. In almost all of these changes,there must have been intervention by the Powers.The state which Britain wanted to make in the Arabian Peninsula needed a bank as a financial core. The Imperial Ottoman Bank was not qualified,because it was split into two factions i.e. the Entente and the Central Powers.After the Russian Revolution of 1917,the army withdrew from Iran.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,400,000	510,000	2,910,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：イラン、トルコ、イギリス、ロシア、第1次世界大戦、帝国主義、金融、中東

1. 研究開始当初の背景

今日の中東の諸問題は、基本的に第1次世界大戦に淵源があるといわれていた。最も良く知られている中東問題であるパレスチナ問題がそうであるし、イラクにしても、国家の成

立自体がこの時期である。このようなことは、いわゆる中東問題の歴史を論じる場合のいわば常識として知られていたことであるが、この常識的議論は「オスマン・トルコ帝国の解体」という点に空間的に限定されることが一

般的であり、イランを含めて広域的な視点から分析がなされることは、本邦では管見の限り皆無であった。

海外では、主としてイギリス帝国史とでも言うべき分野から、こうした広域的視点を持ったすぐれた研究がいくつか存在した。けれども、それらは帝国の外交戦略や軍事戦略、そしてインド防衛といった側面からの議論であり、イランも取り扱われていても、たとえば「イランの為替・金融問題がイギリス・ロシア関係にどのような影響を及ぼしたのか」といった点についてはこれといった研究は存在しなかった。だが私見では、これらは第1次世界大戦全体や中東の生成の問題を論じる上できわめて重要な論点であると思われた。イランは「ロシアと接する中東」であり「イギリス領インドと接する中東」であり「ドイツのインドへの道」であったという点に留意しなければならないと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、第1次世界大戦期のイランに焦点をあてて、その為替や金融の問題を掘り下げて論じることによって、中東の生成を世界経済史的観点から解明することを目的とするものであった。

3. 研究の方法

史料としては、ペルシャ帝国銀行の内部文書やイギリス外交文書を主に用いたが、ペルシャ語史料にも十分に目配りをした。また、ロシア・アメリカの外交文書も用いた。

4. 研究成果

(1) 第1次世界勃発時、イランの財政危機はその極点に達していた。それは外国人財政顧問が領土の売却をイラン政府に提案したほどであった。

(2) ①大戦勃発時におけるロシアのアゼルバイジャン支配は、軍事のみならず、行政官の任免、警察、徴税という支配の本質をなす重要な領域全体に及ぶものであった。ギーラーン地方へは兵士のみならず農民も侵入していた。すなわち実質的にはこの地は植民地なのであった。植民はホラーサーン地方でも見られた。彼らロシアの農民はロシア=プロパーの農民ではなく、中央アジアの農民であった。すなわち、植民は中央からのものではなく、周辺部の外部への伸張という形で行なわれたのであった。ロシアのイラン進出は、さらに、ホラーサーン地方内の北部国境地帯を同地方から行政的に切り離すという形にまで及んだ。そして、このロシアのホラーサーン北部国境地帯支配は、鉄道と道路を通じた対外進出という観点から理解することができるものなのであった。このようなロシアのイラン北部支

配には、ロシアのペルシャ割引貸付銀行が大きく関与していた。

②他方、イギリスのイラン進出にはこの時点に関する限りは軍隊の大規模な進駐や農民の植民といった事実は見られない。イギリスの場合は、貿易ルートを押さえることによる経済浸透とでも言うべきものであった。イギリスの対イラン貿易ルートの内の主要なものが、バグダード=ケルマーンシャールートであった。

③トルコは、参戦に2カ月ほど先立ってこのルートを遮断するなどして、戦争に向けての態勢を整えていた。

(3) ①1915年初め、200名ほどのドイツの工作員がイランに潜入した。イギリスは、ペルシャ湾の奥における自らの権益を守る決意であり、このため、インドから部隊を派遣した。イギリス軍はバグダード奪取を目指して進撃するが失敗する。ドイツはイランを東方へと突破してアフガニスタンに達したが、イギリス帝国を震撼させることはできなかった。

②1915年のコンスタンティノーブル協定はボスフォラス・ダーダネルス両海峡問題とイラン問題とが1つの文脈に統合された主な事例としては最初のものであり、「中東世界」生成を告げるものであった。

③1915年はイランにおいて同盟側の成功が目立った年であった。首都においても地方においても、ドイツの工作員が公然と人々に武器を提供した。テヘラーンでは、イギリス・ロシア両公使の働きかけによって8月に新内閣が誕生した。11月にはロシア軍がアンザリーに上陸した。ロシア軍はテヘラーン近くにまで進軍した。この事態をドイツが逆手に取った。首都をエスファハーンへと遷そうとしたのである。これをペルシャ語でモハーージェラートという。テヘラーン近くのロシア軍は撤退した。モハーージェラート参加者はゴムに臨時政府を樹立し、さらにエスファハーンへと移動した。

④この間、協商側にとってテヘラーンの状況は改善したが、地方の状況は大変悪化していた。イラン南部のほぼ全域が同盟側の工作員の影響下に入った。ロシア軍はカーシャーンにまで達した。12月25日、ファルマーンファルマーが政権を握り、30日にはジャンダルメリーのスウェーデン人指揮官のエドヴァル大佐が解任された。

(4) ①目をアラビア半島に転ずることにしよう。同半島で形成されようとしていた国家は、その資金的中核としての銀行を必要としていた。そのような銀行として、当時すでに存在していた帝国オスマン銀行ジッダ支店はふさわしくなかった。同行は多国籍の性格を有しており、世界大戦勃発によりアイデンティ

ティーを引き裂かれてしまっていた。このアイデンティティーの裂け目は、協商側と同盟側の間のみならず、イギリス・フランス間にも存在した。

②アラブ国家形成を自らの影響下で進行させたいと望んでいたイギリスとしては、ヒジャーズに設立される銀行は純粋にイギリスの銀行でなければならなかった。「純粋にイギリスの銀行」にとっての敵はトルコやフランスにとどまらなかった。無国籍的な世界金融も敵であった。イギリス側の史料における「望ましくない形態の世界市民的金融」という表現は実に鮮烈である。

③「望ましくない形態の世界市民的金融」といえば、メッカ巡礼者がヒジャーズにもたらしたコインが輸入代金決済に用いられるというコインの流れもこれに含めてよいかもわからない。新銀行が設立される場合に予想される反対として、こうした物的基礎の上に生活が成立していた地元住民による反対が想定しえた。これまで、このような問題は、「伝統対近代」「ヨーロッパ対非ヨーロッパ」といった観点から捉えられることがほとんどであったと思われる。だが、このような観点からだけで公正な世界認識が可能なのかどうか、改めて考えてみる必要があるであろう。

(5) ①さて、アラビア半島において資金的中核として必要とされていた銀行としては、ゲラトリー=ハンキー商会やコワスジ=ディンショーの名が取りざたされていた。イギリス外務省はこの問題を「この上なく重要」と認識していた。結局、既存の帝国オスマン銀行ジッダ支店が閉鎖され、ゲラトリー=ハンキー商会がそれを引き継ぐこととなった。この頃から、構想されていた新銀行が史料で「ヒジャーズ国立銀行」と呼ばれるようになる。②最終的には、ヒジャーズ国立銀行設立問題は立ち消えになってしまう。これは、当時、サイクス=ピコ協定の改定という懸案があり、その解決が優先されたからであった。③同じ頃、アラブ政府は金貨輸出をゲラトリー=ハンキー商会ジッダ代理店に集中させた。同社は、インド、アデン、それにスーダンなどでも同様のことを行なおうとしていた。ヒジャーズでは、金のみならず銀も不足していた。通貨全般が不足していたのである。そして通貨のみならず、食料も不足していた。北部諸部族へとばら撒かれた10万ポンドは底をつきつつあった。

(6) ①1917年、ロシアで三月革命が起り、ロシア軍がイランから撤退した。このことは、イラン民主党急進派に希望を与えた。だが、さほど時を経ずしてトルコがイランに侵入し、タブリーズを占領し、ガズヴィーンへと前進しはじめた。

②北イラン全域において反イギリスの熱狂が目立っていた。モストウフィヨルママーレク内閣は弱体で、この熱狂を鎮める意欲も能力もなかった。この間、ジャンギアリーと呼ばれるバルチザン勢力がマンジュールおよびガズヴィーンへと進撃しつつあった。

③このように、首都テヘラーンが、トルコおよびジャンギアリーの脅威にさらされていた。そこでイギリスは、部隊をメソポタミアからガズヴィーンへと派遣した。イギリス部隊はガズヴィーン北方でジャンギアリーを打ち負かし、ロシア軍とともにラシュトとアンザリーを占領した。ここに、協商側によってバグダードとカスピ海とが連絡することになった。

(7) ①1918年11月、協商側とドイツとの間で休戦協定が、パリ北東のコンピエーニュの森で結ばれた。通常、これをもって第1次世界大戦の終結と見なされる。だが、イランでは大戦は終わったとはいえなかった。イギリスとロシアとが国土のかなりの部分を支配していたし、ジャンギアリーという「不安定要素」が存在した。中央政府の力はきわめて弱く、イギリスからの資金注入でようやく命をつないでいるという有様であった。西部を中心に人々は飢饉に苦しんだ。

②これら、領土的統合、国家維持金融。そして飢饉の問題についてここに至る1年ほどの経緯を簡単にまとめれば以下になる。

③まず、領土的統合の問題であるが、1918年3月のブレスト=リトフスク条約で、イランの領土的統合の尊重が明言されている。その二カ月前には、イギリスがアメリカに、イランの領土的統合の尊重を戦後に宣言することに加わらないか、と誘った。加えてイギリスはアメリカに、イランへの銀の貸出を行なわないか、と打診している。また、イランはアメリカに、飢饉救済のための2万ドルの資金供与を依頼している。

④資金が不足していたのはイランだけではなかった。ヒジャーズもそうであった。ヒジャーズで必要とされていたのは、銀よりも金であった。イギリスがこの地にゲラトリー=ハンキー商会を通じて定期的に資金を注入していたのだが（ヒジャーズ助成金）、それでも足りないという状況に陥っていた。エジプト国民銀行発券部の金準備も底をつきつつあり、これ以上あてにはできず、「イギリス自身」が資金を肩代わりした。

⑤以上のように、イギリスは資金の工面に苦勞していた。インド政庁の資金をインド国民銀行を経由して入手するという案が考え出された。もしインド政庁がこれに応じるならば、これら資金を造幣する費用をイギリス財務省が供与する、とされた。この費用は、イランへ向けて積みかえるためにすでにインドへと運ばれている資金から支払われるとされた。

このように、ヒジャーズへの資金供与とイランへのそれとが1つの文脈に収まった。ここに筆者は、世界金融史的観点から見た中東の成立を見出すことができると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①水田正史「トルコ分割とイラン再分割」『地域と社会』 査読有、11号、2008年、125～142ページ

②水田正史「第1次世界大戦の終結と中東の生成」『大阪商業大学論集』 査読無、149号、2008年、21～30ページ

③水田正史「第1次世界大戦期におけるヒジャーズ国立銀行設立問題」『大阪商業大学論集』 査読無、147号、2008年、33～45ページ

[図書] (計1件)

①水田正史、ミネルヴァ書房、『第一次世界大戦期のイラン金融』2010年、182ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水田 正史 (MIZUTA MASASHI)
大阪商業大学・総合経営学部・教授
研究者番号：80219633